

思い出は語り継がれ、 鮮やかに色付いていく

記憶に残る名湯



中山 義則さん(84)



岡本 孝高さん(76)



中嶋 洋一さん(73)

心優しいおじいさんが手負いの鹿を助けたお礼に神の沼で黄金を手にしたという「毛多沼の神の金」伝説が残る金桁温泉。鉱泉の発見は1803(享和3)年頃といわれ、1881(明治14)年には鉱泉浴場として開業しました。最もにぎわったのは、大正時代から昭和初期にかけて。湯治や日帰り入湯客だけでなく、海水浴客の滞在も多かったそう。

——古くから親しまれる金桁温泉。この地域に暮らす3人に話を伺いました。

中山 「昭和初期頃までは

福原旅館や長尾旅館など旅館が数軒あって、湯治客でにぎわったね。鉱泉は茶褐色で、白いタオルを湯舟に浸けたら、すぐに茶色に染まりよったよ。」

岡本 「茶色の湯舟、懐かしかね。子どもの頃は、みなと屋旅館に毎日行きよった。入湯料は5円だったかな。鉱泉のくみ場もあって、2メートル程の竹のひしゃくを使って、飲みよらしたね。」

中嶋 「この鉱泉は昔から胃腸に良いといわれ、親しまれとった。科学的な根拠はないけれど、この地域には胃がんを患う人が少ない気がする。長生きする人も多いかも。」

中山 「金桁川沿いに水脈があって、他にも水くみ場がいくつかあったね。」

中嶋 「お使いといえは鉱泉くみ。この辺りの子は

学校から帰ると、一升瓶を持って鉱泉くみへ行つて、帰り道には『ボンッ』と音を立ててふたが跳びよった。」

3人 「炭酸強かったもんね(笑)。」

岡本 「『ミツゲン』という甘味剤を入れて、サイダーば作りよったね。」

3人 「甘くておいしかったね(笑)。」

中嶋 「小学校の遠足もみなと屋旅館だった。何で学校へ行つて、わざわざ

戻つて来なんとだろうかと思ひよったけど(笑)。プールもあって、よか遊び場だったなあ。」

3人 「当時の面影こそないけれど、ここは新しい交流の場。以前のようににぎわつてほしか。しかも、炭酸の鉱泉は九州ではめずらしい。多くの人に鉱泉を飲んだり、入浴を楽しんだりしてもらいたかね。」

時を語り継ぐ交流の場

——現在の金桁温泉で、接客や施設管理を行う(株)グッドスタッフの高木 励子さんに想いを聞きました。



高木 励子さん
(グッドスタッフ)

お客さまの中には、「50年ぶりに来たよ。」「ここは子どもの頃、祖父たちと来た思い出の場所。涙が出たよ。」などと声を掛けられる方もいて、歴史の重さを実感しています。心の支えともなるこの場所を次世代へつないでいきたいです。ここが、心身共に癒やされる心の拠り所となるよう心を込めて接客し、皆さんにぬくもりを届けたいです。



㊤ 三角今昔写真部 提供写真
昭和30年代のみなと屋旅館
手前の建物が当時、鉱泉を
くんでいた鉱泉湧出所
奥は旅館建物
㊦ みなと屋旅館の近くにある
金桁温泉発祥之地碑



連なる5つの屋根は市内5つの町と周辺の山々を表す